



詩集ちぐはぐな恋



来間タロー

秘密の気持ち

君と一緒にいるだけで
僕は ソワソワ 落ち着かない

嬉しくせに 楽しくせに
連れられない態度で 気持ちを隠す

でも君は なんだか楽しそう
僕が君を好きなのを知っているみたい

何でバレたのって聞くと
君は 嬉しそうに言ったんだ

だって 顔が真っ赤だよ

恋の禁じ手

いつもふざけてるあいつが
珍しく 真剣な顔で 俺に相談してきた
君の事が好きだってな

君をあいつに取られるのが嫌で
とっさに 嘘をついちゃった

やめとけ あの子 性格キツイぜ

数日後 仲良く並んで歩く 君とあいつ
俺は 恋と友人を同時に失った

全ては 自分のせい 俺が馬鹿だと気付いたよ
この手はもう使わないと 決めたんだ

誘い言葉

三度目の恋をして 誘い言葉の意味が判ったよ
今 思い出せば 初恋の君からの言葉

明日暇なんだったって 僕に微笑んだ
そんな簡単な誘い言葉が判らなかったなんて

いくら悔やんでも 時間は戻せないけど
あの時の 君の微笑みは 忘れない

カウントダウン

体育祭 フォークダンスの時だった
パートナーが順番に変わってゆき

君との番まで あと二人 あと一人
遂に憧れの君とダンスができる

カウントダウンの時は
何度も視線が合ったのに
手を繋ぐと 互いに視線をそらしたね

でも 二人は感じたはず
繋いだこの手は 離したくないってね

星の応援団

二度目のデート 君を送る帰り道

夏の星座が 夜空を飾る

さっきまで いっぱい話した唇は

今は なんだか寂しそう

震える手で 肩を抱けば

君はそっと 目を閉じた

君の唇に すぐ触れたいのに 怯えてる

そんな僕に 見かねた星達が 背中を押した

気が付けば 二つの唇は 一つになっていた

本当の君と僕

今日も オシャレでカワイイ服だね
良く似合ってる

でも 気持ちは飾らないで
自分に正直でいてくれよ

どんな事で笑うのか
どんな事で怒るのか

好きなもの 嫌いなもの
嬉しい時 辛い時

もっと 君のことを知りたい

僕は どうだろう
君の理想には 届かないけど
ありのまま僕を知って欲しい

ずっと 君と二人でいたいから

三日だけ咲いた花

前カゴにスイカを載せた自転車を
押していた 夏休み

木陰で休んでる僕に
君は 美味しそうなスイカねって
言ったんだ

都会から来た君には
田舎の風情が珍しく

案内するよって言うよと 微笑んだ

浴衣姿で花火を持つ君に
見とれていたら
線香花火が ポトリと落ちた

君が都会に帰る時
元気でねって 僕の手を握った

僅か三日だったけど
お互いのこと いっぱい話したね

君と出会った木陰に来ると
とても切なく 胸が詰まるんだ

今 気付いたよ
僕は君に 恋してたんだ

いつもの駅

単線鉄道で通う高校まで三駅だけど
二つ目の駅で 必ず待たされる
上り列車と下り列車がすれ違う為さ

僕は上り列車で 君が乗る下り列車を待っている
毎朝 ほんの10秒程の時間だけど
君に会えるんだ

二人はいつもの時間にいつもの列車に乗り
いつもの駅でいつもの場所で 見つめ合う

お互いの姿が見えなくなるまで
共に目で列車を追いかけた

翌年の春 いつもの駅で
スーツ姿の君を見た

高校の制服姿じゃ 同級生に見えたけど
僕より一つ歳上だったんだね

今君は 綺麗でグッと大人に見えたんだ
学生服の僕はまだ 少年なんだと気付いたよ

クラスメート

クラスメートの君は 僕の前席
特別仲が良い訳でもないのに よく話すんだ

でも彼氏のノロケ話はゴメンだね
正直 面白くないよ

僕をどう思ってるかは知らないが
異性としては 見てないんだね

いいさ どうせ君には彼氏が居るし
言葉半分に聞いとくよ

そんなある日 涙目で君が言ったのさ
私のこと 何とも思っていないの

君が彼氏と別れたら 告白するよ

放送席の二人

放送部の僕は 体育祭じゃ みんなと別の席
フォークダンスの時も みんなが踊ってる間
ターンテーブルを見つめてた

三度の体育祭で 一度も踊ってないんだ

切ない気持ちを隠しながら
夕暮れに みんなが帰ったグラウンドで
デカイスピーカーを運んでた

片付けが終わって帰る頃
部員のあの子が言ったんだ

先輩 私も踊ってないんです
よかったら 一緒に踊って下さい

二人だけのフォークダンスは
曲は流れないけど 暗くなるまで 続いたのさ